

# 日本オーステイン協会第17回大会プログラム

---

- 日時：2024（令和6）年6月29日（土） 受付：12：10より
  - 場所：龍谷大学大宮キャンパス 東翼101教室  
（〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町1 2 5-1）  
※JR・近鉄京都線・市営地下鉄烏丸線「京都」駅より徒歩15分。  
※大学ホームページ（[https://www.ryukoku.ac.jp/about/campus\\_traffic/traffic/t\\_omiya.html](https://www.ryukoku.ac.jp/about/campus_traffic/traffic/t_omiya.html)）ご参照のこと。
  - 参加費：日本オーステイン協会会員：無料  
当日会員（上記会員以外）：一般1,000円、学生500円（当日受付で支払い）
- 

◆ 開会の辞（13：00～13：05）

鈴木 美津子（日本オーステイン協会会長・東北大学名誉教授）

◆ 総会（13：05～13：25）

◆ 研究発表1（13：30～14：10）

司会：馬淵 恵里（大阪大学准教授）

発表者：前田 有伊子（東京大学 人文社会系研究科 博士課程2年）

「Plotting Female Characters in Austen's Works」

◆ 研究発表2（14：15～14：55）

司会：馬淵 恵里（大阪大学准教授）

発表者：広本 優佳（東京工業大学准教授）

「Frances Burney, *Evelina* における主人公とサル」

◆ 招待発表（15：00～15：45）

発表者：小山 太一（立教大学教授）

「相続する人々—*Sense and Sensibility* における経済と文化」

司会：新野 緑（ノートルダム清心女子大学特別招聘教授）

◆ 特別講演（16：00～17：10）

講演者：福本 宰之（龍谷大学教授）

「定期刊行物と小説の成立—*The Loiterer* に至る道」

司会：三馬 志伸（英文学者・翻訳家）

◆ 閉会の辞（17：20～17：25）

問合せ先：日本オーステイン協会事務局

〒790-8578 松山市文京町4-2 松山大学新井研究室内

E-mail: [harai@g.matsuyama-u.ac.jp](mailto:harai@g.matsuyama-u.ac.jp)

# 日本オースティン協会第17回大会発表レジュメ

## 【研究発表1】

### Plotting Female Characters in Austen's Works

前田 有伊子 (東京大学 人文社会系研究科 博士課程2年)

本研究においては、ジェイン・オースティン作品におけるヒロインとその他の女性キャラクターを比較検討することによって、そうしたキャラクターの描写の違いや、それぞれが物語内で果たす役割について考察する。「ヒロイン」という用語の定義を検証した上で、比較的初期の作品群から Lady Susan、Lucy Steele と Charlotte Lucas を取り上げて比較対照していく。各小説のヒロインとの対比だけでなく、この3人を並べての比較も行う。

女性作家ジェイン・オースティンの作品には複数の女性キャラクターが登場する。物語の主要ヒロインは誤解や偏見といった自身の短所を乗り越え、その成長の対価として意中の男性と結ばれるが、サブ・ヒロインもしくは脇役とされるキャラクターが迎える結末は様々である。幸せな結婚を遂げるキャラクターもいれば、不幸な結婚生活を強いられる者、社会的に排除されてしまう者もいる。それぞれの辿る結末の違いが、必ずしも各キャラクターの人間性に対する単純な道徳的賞罰に従うものでないことが、本研究の起因となっている。

ジェイン・オースティンの初期作品中に、いわゆる「悪女」と評される女性、Lady Susanが登場する。未亡人である彼女は、その美貌と話術でもって複数の男性に取り入り、時には自分の娘である Frederica を交渉の道具にしてまで、自身の生活基盤を確保しようとする。しかしながら、一見、狡猾で戦略的な彼女の振る舞いは、後ろ盾のない未亡人である彼女が暮らしていくために取ることでできる、唯一の方法であったのかもしれない。物語がポエティック・ジャスティスに則って構築されるならば、彼女は社会的懲罰を受けるべきだが、彼女自身は、当初の目論見とは異なるものの、経済力のある男性と結婚するという目的を達成する。彼女の企ては最終的に暴露され、一部の人々から矚躑を買うものの、それ自体は、物語が始まった時点で彼女が置かれていた状況とさほど変わらない。オースティンの作品群の中でもひと際特徴的な Lady Susan の狡猾な策略家というキャラクター性は、その後の作品 *Sense and Sensibility* に登場する Lucy Steele、*Pride and Prejudice* の Charlotte Lucas へと受け継がれている。*Sense and Sensibility* のヒロインである Elinor Dashwood は、Lucy Steele を美しいながらも教養がなく、品位に欠ける人物だと評する。それ故に、自身が軽んじていた相手から、思いを寄せる Edward Ferrars との婚約関係を打ち明けられたことに、大きなショックを受ける。Lucy は結局 Edward とは結婚せず、その弟 Robert と結婚するが、その結婚生活は、相続権を弟に奪われた Edward と結ばれる Elinor のそれよりも経済的に充実したものである。Elinor と Lucy の幸福度を容易に推し量ることはできないが、悪意をもって Elinor の感情を害し、打算的な考えから Robert に乗り換えた Lucy が、客観的に見て、ヒロインよりも恵まれた立場を手に入れることには違和感がある。

Charlotte Lucas は先に挙げた2人に比べると、プロット上の重要度は低いキャラクターであるかもしれない。Elizabeth Bennet の拒絶した Mr. Collins と結婚する Charlotte は、ヒロインが選ばなかった未来の可能性を示唆している。愛よりも必要に迫られて結婚した彼女は、愚かな夫の存在を極力無視することで、それなりに幸福に暮らしているように見える。しかしながら、ヒロイン Elizabeth はその努力を認めつつも、それを許容しようとはしない。自身の感情よりも生活を優先した Charlotte の結婚を認めることのできない Elizabeth は、無意識に Mr. Collins と結婚した場合の自身の姿を否定している。また反対に、Charlotteこそ Elizabeth であり得たかもしれない。もしも Mr. Darcy が親に決められた通り Anne de Bourgh と結婚して Rosings の管理者となっていたら、Charlotte は愚鈍な教区牧師の夫に代わって、Mr. Darcy の良き相談相手となっていたかもしれない。

Lady Susan も Lucy Steele も Charlotte Lucas も、人物描写は異なるものの、それぞれの知性と知恵を持ち、巧みに自らの人生を構築していった女性である。それにも関わらず、彼女達の知恵はヒロインのそれとは違い、打算的な策略として描かれている。ヒロインに同調するように彼女達に自身を投影する読者は多くないと思われるが、そうであるならば、彼女達は物語世界においてどういう役割を担っているのか。ただヒロインの美德を引き立たせるための反例であるのか。彼女達こそ、フィクションに覆い隠された社会現実を映す鏡であるのか。本研究が目指すのは、ヒロインとその他の女性キャラクターを分かちものを明らかにし、物語においてそれぞれが果たす役割、それぞれの結末の意味を考えることである。

## 【研究発表 2】

Frances Burney, *Evelina* における主人公とサル

広本 優佳（東京工業大学准教授）

Frances Burney の書簡体小説 *Evelina, or the History of a Young Lady's Entrance into the World* (1778) の王道の結婚プロットは、成就を目前に、突如不協和音に遮られる。最後から数えて 3 通目の手紙に生きたサルが登場するのである。*Evelina* の友人の父 Captain Mirvan に連れられたサルは、登場人物たちの集っていた優雅な室内風景をひととおり混乱と恐怖に陥れたのち、キャラクターの一人 Lovel の耳に噛みつき流血沙汰を起こす。ヒロインと結婚する Lord Orville がサルを室内から放り出すと、苦痛と恥辱に喘ぐ Lovel を尻目に、*Evelina* の緊迫した語りは何事もなかったかのように急速に風いでゆき、平静と無関心に回帰する。残りの 2 通の短い手紙で、ヒロインとヒーローは速やかに結婚し、物語は大団円を迎える。

異様なサルのイメージは、当然批評家の関心を引いてきた。Patricia L. Hamilton (2007) は、本エピソードをサルを追い出したヒーローの徳を強調する装置としている。Laura Brown (2010) は、当時ペットとして人気のあったサルは夫の隠喩であり、これが結婚という見かけ上のハッピーエンディングを問題含みに変えていると論じている。*Evelina* におけるサルの解釈には多様性があるものの、それらに共通するのは、サルとメインプロットを有機的に結び付けている点である。しかし、サルの逸話を結婚プロットに組み込むと、その挿入の不自然な唐突さを度外視することになってしまう。また、Lord Orville がプロポーズしたあと（かつ二人が結婚する前に）、実に中途半端なタイミングでサルが登場するという事実にも説明がつかない。Lord Orville がヒロインにふさわしい結婚相手であることを証明し、*Evelina* の配偶者の選択にお墨付きを与えるのがサルのプロットの都合上の使命だとすれば、プロポーズ前にサルを登場させる方が効果的であったはずである。

本発表では、サルのモチーフを無理にメインプロットの流れに回収することはしない。かわりに、本挿話と前後の話の流れの断絶そのものを議論の対象としたうえで、これが一人称語りの恣意性を暴露する一種のレトリックであると仮定する。

‘monkey’ の単語が最初に使われるのは本小説の前半で、実際のサルの登場に大きく先立つ。皮肉屋の Captain Mirvan は、イギリス人男性を ‘monkeys’ にたとえる他、‘parrot’ や ‘pug’ などの愛玩動物の直喩を繰り返し用いている。前半における比喩としてのサルと、後半における実態を持ったサルの間には明らかな対比がある。比喩としてのサルは、後半のサプライズを匂わせる伏線として機能している。伏線が存在は、Burney がプロットの統一性のある程度意識していたことを示すと同時に、Captain Mirvan というキャラクターの自立性を示唆する。サルを比喩として使った後、彼は主人公かつ語り手である *Evelina* の与り知らぬところで、サルを Lovel にけしかける計画を温めていたのだと推測できる。この点に注目すると、サルのエピソードは Captain Mirvan から脇役によるメインプロットからの独立を表現していると言える。悪ふざけに興じた彼が罰を受けることもなく物語は幕を閉じるので、サルと Captain Mirvan の逸話が本小説の訓話的意義に資することもない。ストーリーの統一性に寄与することを拒むサルは、ただサルとして物語のエンディングに屹立する。

サルとそれを連れてきた Captain Mirvan のキャラクターとしての独立は、他の脇役と対照をなす。*Evelina* のフランス人の祖母 Madame Duval、親戚 The Branghtons、*Evelina* にしつこくつきまとう Lovel らは、*Evelina* の視点において一様に我が強いでしゃばりな人物として描かれる。しかし、彼らが粗野であってくれるおかげで、*Evelina* は相対的に美德の評判を獲得できているのだとも言える。自身の欲望に忠実であればあるほど、脇役たちが *Evelina* の物語にいつそう従属してしまうというパラドックスが発生しているのである。本発表は、主人公の一人称語り脇役の独善的行動を搾取し、これを自身の物語へ回収していくプロセスを明らかにすることを目的とする。

サルと Captain Mirvan は、このような主人公と脇役のプロット上の主従関係の外に存在している。この事実、同じく終盤に暴力的エピソードがねじ込まれる Jane Austen, *Emma* (1816) との比較によっていつそう際立つ。近所で鶏小屋が襲われた話を聞いて震えあがった Mr Woodhouse は掌を返し、Knightley が Emma と結婚し Hartfield に越してくることに賛成する。鶏小屋荒らしの逸話は、二人の結婚を都合よく推し進める作用を果たすのであり、結婚プロットの強制力に従属している。対して、*Evelina* におけるサルはプロット上の意味・役割を「持たない」ことにより、結婚プロットと一人称語りを持つ引力をメタフィクショナルに可視化する装置として機能するのである。本発表は、エコクリティシズム的にサルという動物の独自性を主張することを目的としていない。ただし、*Evelina* におけるサルの逸話

をフォーマルに解釈することにより、本小説におけるプロットから独立したサルを表象が、それが愛玩動物であったという歴史的事実に対するアイロニーになっていることを示すこともできる。

## 【招待発表】

相続する人々——*Sense and Sensibility* における経済と文化

小山太一（立教大学教授）

*Sense and Sensibility* は、土地と金銭の相続をめぐるきわめて世知辛い物語である。Jane Austen の作品中で、相続の経済面が人間に課す多種多様な制約を描き出す際の具体性と露骨さにおいてこの作品が群を抜いていることは注目に値しよう。Dashwood 姉妹の有力な結婚相手候補である Edward Ferrars と Willoughby は推定相続人という立場ゆえに恋愛における行動の主体性と責任を担えなくなっているが、土地および金銭の相続から排除されてしまった身である Elinor と Marianne もまた、結婚相手の獲得という社会的ゲームにおいてひたすら待つという手しかプレイすることができないでいる。

同時にこの作品は、個人（とりわけ女性）が世界を受容する際の感受性の作法がどのように社会的にシステムタイズされて未来へと向かってゆくかをめぐって展開する、文化的な相続の物語でもある。本論では、オースティンがこれら二つの相続をどのような形で互いと相わたらせ、真率にしてアイロニカルな物語空間を作りだしているのかをいま一度考えてみたい。

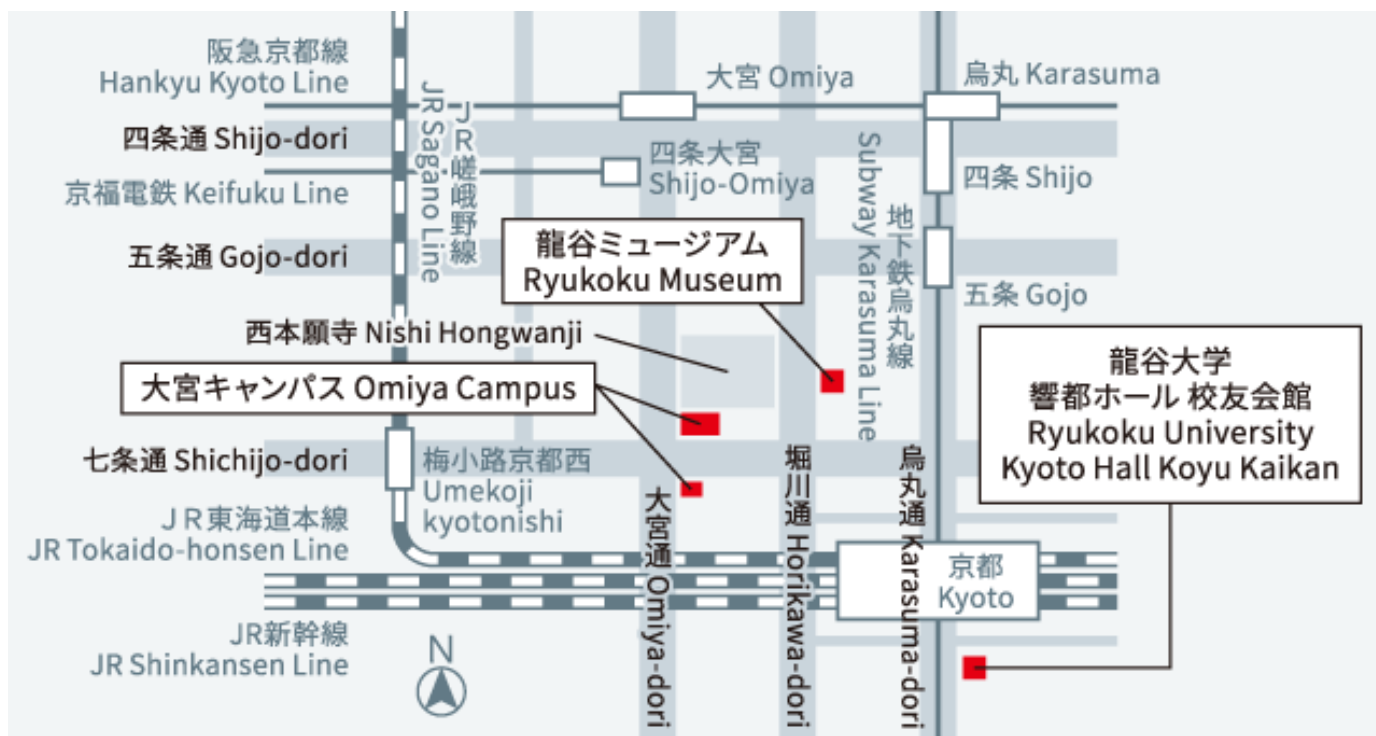
## 【特別講演】

定期刊行物と小説の成立 — *The Loiterer* に至る道—

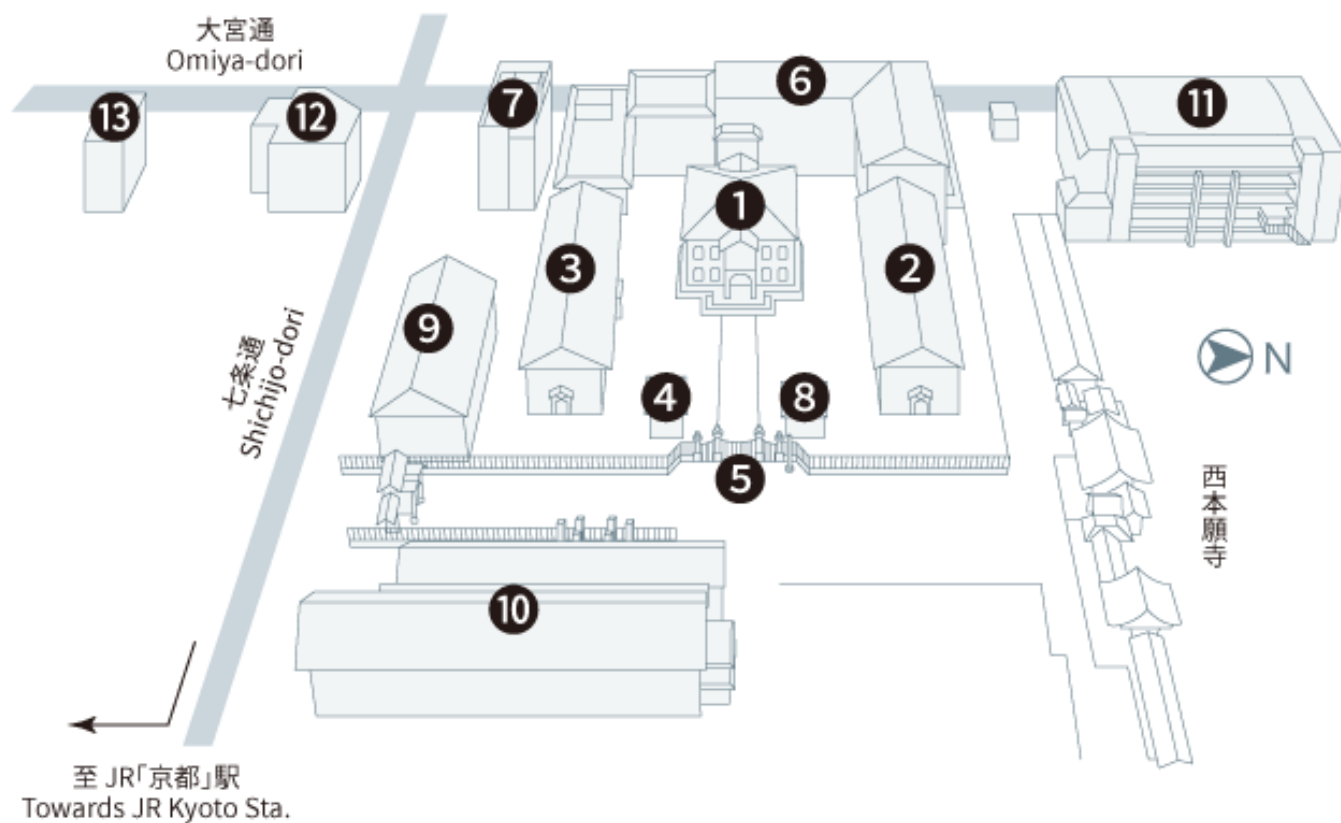
福本宰之（龍谷大学教授）

18世紀の定期刊行物と言え、アディソンやステールが手がけた *The Tatler* や *The Spectator*、*The Guardian*、あるいはジョンソンの *The Rambler* や *The Idler* といったものが頭に浮かぶであろう。そして、これらのタイトルには一つの共通点が見られる。全て人間を指す言葉であるという点である。これらの紙面の多くの部分は、編集者が筆を揮ったエッセーと共に、読者から寄せられた(または読者を装って編集者自身が書いた)投稿文が占めており、それらの宛名は「スペクテーター紙」や「ランブラー紙」ではなく、「スペクテーター氏」や「ランブラー氏」である場合が多かった。つまり我々が新聞投稿としてイメージする世間一般に広く自らの意見や主張を投げかける、「...ではないでしょうか」式の内容ではなく、あくまで個人に宛てた書簡の形式を取っていたのである。英文学史上最初の本格的な小説と目される *Pamela* が書簡体小説であったことは、作者リチャードソンの伝記的事実との関連で語られる場合が多いが、定期刊行物の影響も看過できないのではないだろうか。今回の講演はこのいささか大きすぎるテーマについて、問題提起をして見たい。また上で述べた定期刊行物の特性は、*The Loiterer* にも引き継がれており、最後にその点についても門外漢ながら意見を述べてみたい。

【交通アクセス】



【キャンパスマップ】



会場の「東覺 101 教室」は、⑩の建物にあります。